

長恨歌「舊枕故衾誰與共」句の典據に就いて

遠藤 寛一*

白居易の長恨歌、「舊枕故衾誰與共」は他に「翡翠衾寒誰與共」^①の句に作る本が傳わっている。いずれの句も玄宗が楊貴妃を悼亡することには變わりはないが、なぜかかことが生じたのか。居易自らの改稿であったとしたならば、なぜそうせざるを得なかったのだろうか。このことに就いて考えてみたのである。

一

『詩經』唐風・葛生篇

角枕粲兮、錦衾爛兮。予美亡此、誰與獨旦。

の句には「枕」、「衾」、「誰與」の語が用いられており「舊枕故衾誰與共」の句はこれに依ったものではないかと思われる。また「毛序」に

葛生、刺晉獻公也。獻公好攻戰、則國人多喪矣。

とあり、『鄭箋』には、

喪、棄亡也。夫從征役。棄亡不反。則其妻居家而怨思。

とある。葛生篇は晉の獻公を刺った詩で、夫が戦に出て歸らなかったのを妻が怨みに思ってたというのである。

「角枕粲兮、錦衾爛兮」の句に就いて『毛傳』には、

齊則、角枕錦衾。禮、夫不在、斂枕篋、衾席褥而藏之。

と言い、齊戒には角枕と錦衾を取り出して祭り、また『禮記』内則篇を掲げ、

夫不在斂枕篋、韋席褥器而藏之。

と言っている。夫が不在の時、妻が夫に代わって祭りを執行するが、その時には齊戒に用いる角枕と錦衾を取り出すと言っているのである。

『鄭箋』には、

夫雖不在、不失其祭也。攝主、主婦、猶自齊而行事。

とあって、これは夫が不在といっても妻が夫に代わって祭りを執行しなければならぬことを言っている。

角枕に就いて、『周禮』玉府に

大喪、共含玉、復衣裳、角枕、角枵。

とあり鄭玄は

角枕、以枕尸。

と註を施している。「錦衾」に就いては、『禮記』喪大記に

輿用斂衾、死去衣。

とあり、また、

小斂……君錦衾、大夫編衾。

とあることから死者に着せる經帷子であることが分かる。つまりは、「角枕」、「錦衾」ともに死者への副葬品である。「角枕祭兮、錦衾爛兮」句の「祭」に就いて考えると、支は殘骨の形を表わしその色は米を精した白さであることから白く輝くさまを言うのであり、「爛」は『說文解字』に「爛、孰也」とあるように灼いて孰すること、つまり火で灼くことからその光り輝く形を言うのである。「祭」も「爛」もきらきらと輝く意と解することができる。尚、朱熹は『集傳』に於いて「祭爛、華美鮮明之貌」と言っているが、これは白居易の目に触れるはずがないから参考にとどめておく。いずれにせよ死者の埋葬に関わる語には變わりがない。ところで「予美亡此」とある「予美」の「美」は男女いずれを指しても良いが、ここは征役した夫である。「私の夫は此に亡く」の意と解する。「亡」は、『說文解字』に「亡、逃也」と

あるが、白川静氏が、

死者の肢體の屈折した形を表している^②。

と述べておられる。「亡此」とあるのは夫の死を指して言うのである。

『毛詩會箋』に、

春秋時、戰敗者多棄其屍

とあるように春秋の時代には、戰死者の遺骸が野葬された例が多いと述べている。

楊貴妃の場合も長恨歌に「花鈿委地無人收」、「翠翹金雀玉搔頭」とあって楊貴妃が殺された時の様子を「馬嵬坡下泥土中、不見玉顏空死處」に作るが、それは遺骸が野葬されたことと等しい。

また葛生篇に

誰與獨旦。

とあり「旦」に就いて『鄭箋』には、「旦、明也」とある。これは『說文解字』に

旦、明也。从日見一上。一、地也。

とあるのに據ったもので夜が明けること、日の出を言っている。従って「獨旦」は「獨り夜明けを迎える」の意であるからこれを長恨歌の玄宗が獨りで夜明けを迎えることを言った「耿耿星河欲曙天」の句で表わしている。

この「誰與」の語に就いては『鄭箋』に「吾誰與居乎。獨處家耳。」

從軍未還。未知死生。其今無於此」とある。「予美亡此、誰與獨息」の句に『毛傳』は、「息、止也」と註し、また「予美亡此、誰與獨旦」の句は、『鄭箋』は「我君子無於此。吾誰與齊乎。獨自■明」と記す。即ち「誰與」は、誰と行動を一緒にしたらよいのか、これをいまここには居ない、想う相手に悄然たる思いでむなく語りかけたという孤独の寂しさを述べている。

かくして白居易は葛生篇「角枕粲兮、錦衾爛兮。予美亡此、誰與獨旦」句を據りどころとして初稿「舊枕故衾誰與共」の句を作り、玄宗の楊貴妃への思いを託したのであった。

二

『詩經』という確かな典據を踏んで作られた句が何故に改稿されたのであろうか。この問題を字義の面から考えてみた。

長恨歌、「舊枕」の「舊」字は『說文解字』に「舊、鴟鵂、舊畱也」とある。崔は毛角のある鳥、みみずく、ふくろうのことを言う。白川静氏は『淮南子』・萬畢術を引いて

「鴟鵂もて鳥を致す」の注に「鴟鵂を取り、その大羽を折り、その兩足を絆ぎ、以て媒（おとり）と爲し、羅をその旁に張れば、鳥則ち聚まる」

とみえ、昼はものの見えぬみみずくに、鳥が報復しようとするのを利用して、鳥を捕るのであるという。足をとられると脱することのできないものであるから、旧留・旧止の意となり、久時の意となると述べている。

朱駿聲『說文通訓定聲』は『莊子』・秋水を引いて

案莊子、秋水、鴟鵂夜撮蚤。豪末畫出、瞑目而不見。取山是撮蚤、非拾人爪也。

と記し、舊を「段借、爲久」としている。舊は段借で本字は「久」であるというのである。

従って舊枕は、「久しく使わなかった枕」或いは「むかしの枕」、「かつて使っていた思い出の枕」の意となる。

「故衾」の「故」は『說文解字』に「故、使爲之也」とあって「从支古聲」とある。段玉裁は「今俗云、原故是也」と言い「墨子經上曰、故所得而後成也。許本人」の例を掲げる。

白川静氏は「故の諸義は、すでに古のうちに含まれているところがあり、故旧、故事の意は、古の字義そのままである」とされ、加藤常賢氏は「事の變化の意」^⑤とされている。従って「故衾」の意は、昔、仲睦まじかった二人だが、今は經帷子を見ることになってしまった。という意に解せられる。

長恨歌、「舊枕故衾誰與共」の句は、「かつて二人で使っていた思い出の枕があるものの、今となっては亡き楊貴妃を偲ぶ經帷子を見ることになった。今後は誰と居たらよいのか」と解することができる。

ところで白居易はなぜこの句を「翡翠衾寒誰與共」に改めたのであろうか。改稿後の句は、「枕」が消え、「衾」が強調されている。「舊枕」に作る句は死に装束で身を固めた、馬鬼の駅で亡くした楊貴妃への後悔の念を歌ったものと解されかねない。これではせっかくの典據を踏んだ句であっても居易の意圖するところが十分に傳わることはなく、改稿を決意したものと思われる。

三

「翡翠衾寒誰與共」の「翡翠」に就いては『玉臺新詠』の序に

長樂鴛鴦、奏秦聲於度曲。……瑠璃硯匣、終日隨身、翡翠筆牀、無時離手。

とある。ここでの鴛鴦は宮殿の名であり翡翠は筆牀の形容として用いられ、美しい筆を表わす語である。

巻五、范曄の「詠歩揺花」には

珠華縈翡翠、寶葉閒金瓊。

とある。箋註は「異物志、赤而雄者曰翡、青而雌者翠」と言っている。また「低枝拂繡領、微步動瑤瑛。但令雲髻挿、蛾眉本易成」とある。

「歩揺花」、「金瓊」、「微步動瑤瑛」、「雲髻」の語からは長恨歌の「雲鬢花顏金步揺」の句が想い起こされるものの「翡翠を縈らす」というのは翡翠の羽毛を周圍に張り付けめぐらすことであるから衾に就いて触れたものではない。

また巻六、王僧孺の「春閨有怨」には

月映寒蛩褥、風吹翡翠帷

と見える。「翡翠帷」に就いて箋註は梁簡文帝・箏賦に「出翡翠之香帷」とあるのを挙げている。

また巻六、姚翻の「同郭侍郎采桑一首」には

風揺翡翠簾

とある。

巻七、皇太子簡文の「南湖」にも

銀綸翡翠鉤

とある。ここでは翡翠の羽のついた釣り針のことを言っている。

巻七、皇太子簡文の「戲作謝惠連體十三韻」には

珠繩翡翠帷

とある。珠の飾りを繩につけ、翡翠の模様のある戸張りのことを言っている。

巻九、沈約の「春日白紵曲一首」に

翡翠羣飛飛不息、願在雲閒長比翼

とある。この句は「長恨歌」の「在天願作比翼鳥」の句の據りどころとして考えることができる。

巻九、劉孝威の「擬古應教一首」に

雙棲翡翠兩鴛鴦、巫雲洛月乍相望

とある。翡翠の鳥、鴛鴦の鳥、ともに雌雄離れることのない鳥で仲睦じい夫婦をこのように言っている。

『說文解字』には

翡、赤羽雀也。出鬱林、从羽非聲。翠青羽雀也。出鬱林、从羽卒聲。

とあり、『文選』巻一、班孟堅の「西都賦」に

翡翠火齊、流耀含英。

の李善の註に

長楫上林賦注曰、翡翠大小如爵、雄赤曰翡雌青曰翠。

とあり、翡は雄で赤色、翠は雌で青色の雀を言うところ。卷十三の張茂先の「鷦鷯賦」に「彼鷽鷽鷽鷽孔雀翡翠」の句に對する李善註に「應劭曰、雄曰翡雌曰翠。異物志曰、翡赤色大於翠顏監曰、鳥各別異非雄雌異名也」と言っている。卷五、左太沖の「呉都賦」には「翡翠列巢以重行」とあり李善は「翡翠巢於樹顛生子。夷人梢徒下其巢子大。未飛便取之皆出於交趾鬱林郡」と註を施している。卷四、左太沖の「蜀都賦」には「翟翡翠、釣鯁鮪」とあつて翡翠を網を用いて捕らえようとしている。これもその羽毛の色が美しいからで、張平子の「西都賦」には

文以朱綠、翡翠火齊、烙以美玉

とあり、また卷十九、宋玉「神女賦」には

若翡翠之奮翼。其象無雙、其美無極

とある。翡翠は番で居り、卷二十一、郭景純の「遊仙詩」にも「翡翠戲蘭召」とある。また卷三、張平子の「東都賦」には、

翡翠不裂、璚瑁不族。

と、翡翠を裂いてその羽を得ることがいかに難しく、また羽を取って

翡翠にあやかうとしていたことがわかる。卷八、楊子雲の「羽獵賦」には

玄鸞孔雀翡翠垂榮。

とあつてその羽毛の榮えるばかりの美しさが歌われている。

卷七、司馬長卿の「子虛賦」に「錯翡翠之威蕤」とありその李善註に「張揖曰、錯其羽毛以爲首飾也」とある。翡翠のしなやかな羽で作った首飾りのことを言っている。卷九、楊子雲の「長楊賦」には「却翡翠之飾、除彫琢之巧」とあつて調度裝飾に用いられていたことを言っている。

卷三十三、宋玉の「招魂一首」には

翡翠珠被、爛齊先些

とあつて李善は

雄曰翡、雌曰翠、被衾也

と註を施し、また「翡翠帷幃、飾高堂些」とあつて『楚辭』・洪興祖の補注を引いて

言復以翡翠之羽雕飾、幃張之高堂以樂君也

と記している。

長恨歌の「翡翠衾寒誰與共」とある「翡翠衾」は「翡翠珠被」のことであつて、李善は、被を衾のこととしてのことから翡翠の刺繍のある掛け蒲団に珠飾（眞珠の飾）を施したものを言い、翡翠の鳥から

新婚當時に用いたものであろう。

四

以上によって「翡翠衾寒誰與共」に改めた意圖は、長恨歌に「雲鬢花顏金步搖、芙蓉帳暖度春宵」の句を「翡翠衾」によって想起させ、玄宗の楊貴妃をはじめ全てを失った後の孤獨を感じさせる。語も「帳」に對して「衾」、「暖」に對して「寒」に作ってある。また前句「鴛鴦瓦冷霜華重」の「鴛鴦」に對して「翡翠」に作ったものと考えられる。「舊枕故衾誰與共」と作る句の「衾」は『詩經』葛生篇に據ること、當時の知識人ならば誰もが知り得ることであった。それ故亡き楊貴妃を懷う玄宗の心の内を捉えることができるがそれだけに止まってしまふ。しかし「翡翠衾寒誰與共」に作った句の場合は、楊貴妃と共に過ごした、三千の寵愛を一身に集めた頃の楊貴妃を懷かしむが故に總てを失った、わが身の孤獨を悲しむ玄宗の姿および心が表わされている。

○

なお改稿の據りどころとして他に考えられるものとしては『玉臺新詠』卷二・阮籍の「詠懷詩二首」の其二「昔日繁華子」の詩が掲げられる。

昔日繁華子、安陵與龍陽、天天桃李花、灼灼有輝光、悅懌若九春、
磐折似秋霜、流眄發姿媚、言笑吐芬芳、携手等歡愛、宿昔同
衾裳、願爲雙飛鳥、比翼共翱翔、丹青著明誓、永世不相應。

とある。『詩經』周南・桃夭篇を踏んではいるが詠懷詩では容色ゆえに君につかえた男子のことを述べているのであって若き女子を言うの

ではない。長恨歌の句「在天願作比翼鳥」は「願爲雙飛鳥、比翼共翱翔」に、「此恨綿綿無盡期」は「永世不相應」の句に比することができ、句の示す意が類似していることのみを以て輕々に論ずべきではないと思う。

特に注目すべきは「宿昔同衾裳」とある句でここではかつて衾を共にしたことを言っている。なお、『文選』卷二十三・阮嗣宗・詠懷詩十七首とあるその四首目に同詩が収められているがそこには「宿昔同衣裳」と作る。また『玉臺新詠』卷二・情詩五首・其一・北方有佳人篇に「願託晨風翼、束帶侍衣裳」の句があり、ここで言う「衣裳」はかけ蒲団の意である。

また同じく情詩其三「清風動帷簾」に

衿懷擁虛景、輕衾覆空牀。居歡惜夜促、在感怨宵長。撫枕獨吟歎、綿綿心內傷。

とあり、長恨歌に見える「衾」、「枕」、「綿綿」の語が見えるが直ちに白居易がこの詩に據ったとは断言できない。

注

(1) 「舊枕故衾誰與共」に作る

文苑英華本、金澤文庫本、三条西家旧藏本、清原宣賢本、正宗敦夫文庫本

尚、文苑英華本には「集作翡翠衾寒」と校記している。

「翡翠衾寒」に作る

太平廣記本、宋本、四部叢刊本、明歷刊本、古文眞宝、松花堂昭乘

本、白氏五妃曲本、秘點本、全唐詩本

(2) 白川静『字統』(平凡社、一九九四年三月) 七九六頁参照。

(3) 白川静『字統』(平凡社、一九九四年三月) 一七一頁参照。

(4) 白川静『字統』(平凡社、一九九四年三月) 二七六頁参照。

(5) 加藤常賢『漢字の起源』(角川書店 昭和四十五年三月) 三九二頁参照。

(6) 元槿の「白氏長慶集序」には「禁省、觀寺、郵候、牆壁之上無不書、

王公、妾婦、牛童、馬走之口無不道。至於繕寫模勒、街賣於市井。或持之以交酒茗者」とある。市井のは店頭で賣られてたり、酒茶の代価として扱われていた。また「雞林賣人、求市頗切。自云、本國宰相、每百以百金換一篇、其甚僞者、宰相輒能辨別之」とある。雞林の宰相までもが偽作を辨別するまでに白詩は流布していた。